

古典に親しませる授業の条件はなにか

尾 西 陽 一

はじめに

最近よく高校生の未成熟さが指摘されている。授業に集中できない、私語が多いなど学習そのものが成立できにくい状況が出てきている。それと呼応して学習意欲の低下が顕著なものとなってきている。

また、新教育課程になっても、変わったのは教科書だけで、国語教室の内実は、それほど変化していないという実態がある。

このような状況の中で、国語工において、学習者に、古典に親しませるにはどのような配慮が必要となるのか考えてみたい。

I 高校一年生の「古典」についての意識の断面

(ウ) 教材への興味(使用教科書「国語工」第一学習社)

教材	男子	女子
○ 仁和寺の法師	20%	14%
○ ち児のそら寝	32%	29%
○ かぐや姫の生ひたち	4%	13%
○ 筒井筒	7%	13%

(イ) 右の教材の中で最も興味のあったもの

教材	男子	女子
○ あづさ弓	20%	23%
○ 義仲の最期	7%	8%
○ 仁和寺の法師	16%	10%
○ ち児のそら寝	55%	39%
○ かぐや姫の生ひたち	2%	4%
○ 筒井筒	1%	6%
○ あづさ弓	24%	33%
○ 義仲の最期	2%	8%

(ウ) 生徒が興味をもった理由
(1) ち児のそら寝

- a 人間の本当の姿を描いている
- b 少年の動作がおもしろい
- c この見と同じようなことをしたことがあるから
- d 最後のところがおもしろかった

e 少年に共感できるから

f 昔の人も自分たちと同じと思っただから

(2) 仁和寺の法師

a こういふ経験をしたことがあるから

b 法師の一人よがりの行動がおもしろい

c 知ったかぶりをして中身の無い人間の話に興味をもった

d 自分の信じた道をすすむ点がおもしろい

(3) あじき弓

a 女の子のかわいそうでならない

b 女の子の気持ちがありありと出ている

c すべての歌に感動した

d 血で歌をかく情熱

これらは、一学期の入門期の教材群の中から選ばせたものである。男子のばあい、大半の生徒が「ち児のそら寝」をあげており、女子のばあい、「ち児のそら寝」「あじき弓」と両極にわかれている。「ち児のそら寝」が評判がいいのは、中心人物が少年であること、話の内容が子供の心理をよくとらえていることによるのではあるまいか。

また、作品をとりあげた理由として、「昔の人も自分たちと同じである」「少年に共感できる」「こういふ経験をしたことがある」「女の子のかわいそうでならない」などと、学習者の身にひきつけ

て感じうるかどうかの評価の基準になっていることに注目したい。古典の入門期においては、古典の中の若者が活写されている教材がやはり学習者の心をひきつけていく。その点、「ち児のそら寝」「あじき弓」などは入門期の教材としての価値の高いものをもっているといえよう。

(4) 文法の理解度

※古文小テスト

(A) 次の話のよみを書きなさい。

① 妹 ② 異心 ③ 前栽 ④ 離れぬる ⑤ 去なむ

(B) 次の語句の意味を書きなさい。

① 恥ぢかはす ② 過ぎにけらしな ③ 年ごろ経るほど

④ いふかひなくてあらむやは ⑤ うちながむ

(C) 次の傍線部の()品詞名 ()活用形を書きなさい。

① 田舎わたらひしける ② 井筒にかけしまろがたけ

③ くらべこしふりわけ髪 ④ この女をこそ得ぬ

⑤ 夜半にや君がひとり越ゆらむ ⑥ ふりわけ髪も肩すきぬ

(各1点)

小テストの結果

C	1	1	1	0	3	0	0	1	0	3	0	0	2	4	0	1	2	2	4	2	2	2	1	0	1	3	1	1		
B	0	1	2	2	2	2	1	0	4	2	1	0	欠	0	2	3	2	1	2	1	0	1	1	2	欠	2	0	2	2	1
A	2	3	5	1	5	5	2	3	3	5	3	4	3	3	1	1	1	3	2	3	3	2	3	1	2	5	3	3	3	
No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30

(No.は生徒、A、B、Cはテスト項目を示す)

伊勢物語の「筒井筒」を学習した後の小テストの結果である。(A)のよみはそれほどでもないが、(B)(C)はいずれもよくない。

一学期の間の助動詞の学習は、△時▽をあらわす、次の助動詞を中心にして読むことと関連しながら指導した。

△き▽△けり▽△つ▽△ぬ▽△たり▽△り▽△む▽
△らむ▽△らし▽△めり▽

△む▽そのものが助動詞であるとわかっていても、「われこそ得ぬ」の「ぬ」を説明させてみるできない。生徒に聞いてみると、「○、○、む、む、め、め、○」という活用が複雑で覚えきれないとのことである。まして「いふかひなくてあらむやは」という屈折した表現になると、生徒にとっては不可解で「外国語みたいにむずかしい」という感想をもつにいたる。

読解と関連させながら、古典文法の基本的な事項を定着させる方法についてさらに考えなければならぬ課題は大きい。

II 一年生の古典についての考え方

一学期の学習をふまえて、生徒に次のような事項について感想をもとめた。

※ 一学期の古典学習に思うこと。

(ア) あなたにとって古典とはなにか。

(▲) は否定的な感想、○は肯定的な感想

▲生活に関係のないもの ▲苦痛なもの ▲必要はないが、教育

上しかたのないもの ▲きらいな科目の一つ ▲わかりにくい科目の一つ

○すきだけできないもの ○はじめはわからなくても、しだいにわかるようになったとき、うれしくて感動をよぶもの

○古い文章を読んで、新しいことに気づくことのできるもの

○昔のことばづかいを知り、物語を読むよるこびを感じることもできるもの ○新しい世界を感じさせてくれるもの

(イ) 原文を筆写して思ったこと

▲とにかくめんどろだ ▲手間をとるだけで意味がない

○勉強したなあと感じる ○心が落ちつくし、案外たのしい

○わからないところがよくわかる ○文章を味わうことができる

○読むだけよりも、書いた方がわかる気がする ○あとから書き

こみするのに便利がよい

(ウ) 古典を読んで目をひらかれたこと

○文章にリズムがある ○昔の人も人と思う気持は同じだ ○昔

はうつくしいといえるものがあつたが今はない ○一つのことば

にもいろいろの意味があり、びっくりした ○中学のときとは違

って奥深いことがわかった ○古文の本が抵抗なくひらけるよう

になった ○昔の生活風景がわかるようになった ○ロマンがあ

ると思った ○ことばづかいに敏感になった ○昔の人がこんな

にすばらしい表現ができるのだから、現代人はもっとすばらしい

表現をすべきだ

かなりの生徒が古典の学習を「苦痛なもの」「生活に関係のないもの」といううけとめ方をしていることはたしかである。これは、「めんどろなことはしたくない」という現代の高校生生活意識と深くかかわっていると考えられる。このような否定的な受けとめ方をしている生徒もいるが、また反面、肯定的な意見を述べている生徒もかなりいることも確かである。高校三年間で学習していくあいだに、古典のよさを実感できるような、古典との豊かな出会いを体験させていくことが、高等学校における国語教室の大きな課題である。

わずか高校入学後一学期の古典学習で、「古典の世界で目をひられたこと」を聞く方が無理なことだが、それでも、「古文の本が抵抗なくひらけるようになった」という一生徒のことは注目したい。この生徒は、高校に入学した当初、古文の学習にやや抵抗感があった。しかし、学習をかさねていくうちにその抵抗感がやわらいで、楽しく古典学習にいそむことができるようになってきているのである。

また、「二つのことばにもいろいろな意味があり、びっくりした」とある生徒は書いている。このことも重要なことである。古語の世界の奥深さを驚きをもって感じとっている。このことばへの「驚き」が一つの契機となって、古典の世界への関心を深めていく可能性をもっている。古典語への新鮮な驚きを持続させていくことも、きわめて肝要なことである。

III 古典に親しませる授業をもとめて―古典の授業に「書く」と「をとりいれた実践例」―

国語Iの教材を扱うばあいの視点の一つとして「総合的」な観点がある。この「総合」ということについて、宮池裕氏は次のような提言をされている。

総合するということは、混合することではない。また、単に加え並べることでもない。総合するということは、大小いくつかの単体を、一つの立場、一つの観点のもとに、有機的に組み合わせ、全体として一つの新しい組織体を作ることだと思っ。

(『総合国語の一視点「言語と文字」第十五号所収』)

国語Iの授業を計画していくばあい、この総合についての考え方は基本となる視点である。

ここでは、古典学習において、「理解」と「表現」とを関連づけた事例を紹介してみたい。

※ 百人一首のパロディを作る

冬休みを前にして百人一首を生徒に紹介するために設定したものである。高校一年生に対して和歌に親しませることを目標にしたものである。

作品例1

「奥山にもみち踏みわけ鳴く鹿の声きく時ぞ秋はかなしき(猿丸大夫)」のパロディ

▲奥山に秋は悲しき という構造の表現に一貫した意味をもったことばを入れさせてみる。

- 奥山にもの音したる夕ぐれに栗のいがさへ秋は悲しき
- 奥山に落つる枯れ葉の音ききて風知る時ぞ秋は悲しき
- 奥山に足跡残し旅立つた男のロマン秋は悲しき

作品例2

「月みればちぢにものこそ悲しけれわが身ひとつの秋にあらねど
 (大江千里)」のパロディ

「見れば」悲しけれ (一) ならねど という主題文——補足
 文の表現形式で表現させる。

- 空みればわが心こそ悲しけれ落ちこぼれゆく我にあらねど
- 星みれば昔の思ひ悲しかりこの世にすでに親父あらねど
- 花みれば枯れゆく姿悲しけれ花だけのさだめにあらねど

作品例3

「明けぬれば暮るるものとは知りながらなほ恨めしき朝ぼらけか
 な (藤原道信朝臣)

▲「(する) ものとは知りながらなほ恨めしき」という表現形式
 をふまえて作る。

- やらなげりやできぬものとは知りながらなほうらめしき悪
 い成績
- 夜があけてきらいな日とは知りながらなほうらめしき月曜
 日かな

影
 ○旅立てば帰って来ぬとは知りながらなほうらめしき彼の面

これらの作品はすべて短冊に記述させて回収し、読みあげていっ
 たものである。いずれも、即興的につくらせたものであるが、まど
 まった意味のくみとれる作品が多くみられた。このような方法によ
 っても、和歌に親しみを感じ、五・七・五・七・七という表現形式
 に慣れていくことができる。

まとめ

高校生に古典学習の意義を説明しても、実感としてわかってくれ
 る生徒は余り多くないかもしれない。古典の味わいというものは、
 人生体験をつみ重ねていくにつれて了解されていくものである。
 高等学校の国語教室でおこなわれる古典学習、とりわけ国語Iに
 おいては、古典への興味をいかにしてもたせるかに重点をおかなく
 てはならない。従来の国語科ではあまりとりあげられなかった指導
 方法、現代文、作文などと古典教材を関連させる方法によって、古
 典を日常の言語生活の諸相と結びつけることによって、古典は生徒
 に身近なものとなる。

その点、大平浩哉氏の次のようなご指摘は、古典教室を充実させ
 ていく上で吟味していく必要がある。

入試に必要なからというだけの理由で、解釈技術を中心とした
 古典指導、文法中心の古文指導に偏るようなことがあったら、教
 育界自体の中で高等学校における古典教育そのものの存在価値が

問われかねないのである。

〔大平浩哉「高校国語教育の新しい方向」『日本語学』第二卷第三号〕

昭和五八年第一学期における高校一年生の実態を中心にして提案したものをまとめたものであるが、あくまで問題の素描におわったことを残念に思っている。高校生の認識力、言語能力をたかめるための具体的実践例の報告は後日に期したい。

（昭和59年8月6日記）

（大分県立竹田高等学校教諭）

（現大分県立大分上野丘高等学校教諭）

△新刊紹介▽

△新刊紹介△